

041 顔面神経麻痺

女性 七十七歳

主訴 顔面神経麻痺、左閉眼できず、口が歪み、しわもできず、味もはっきりしない。

現症 1週間前に左顔面神経麻痺がでる。これ以前に（この2日前）にヘルペス発現し、来院した時は、左閉眼できず、口が歪み、しわもできず、味もはっきりしなかった。

所見 脈は「やや緊」、「右天枢」(+、「労宮」(+、「天牖」(+、「胸鎖乳突筋」(++))。

処置 「扁桃」、「丘墟・上四瀆」、「肺実」、「横V字」、「局所」をやっていく。

経過 2回目（4日目）、初回の晩はよく眠れたという。
3回目（8日目）、味覚が80%戻る。
4回目（11日目）、左閉眼できてくる。味覚も90%くらい回復していると。胸鎖がやや緩む(+)
6回目（16日目）、口笛ができた。
これ以降、訴えが顔から大腿部の痛み、しびれに移り、主にこの治療になる。だから顔面神経麻痺は20日余りでほぼよくなったことになる。顔面の麻痺だったが、胸鎖乳突筋の緊張が印象に残っている。

「筋緊張緩和処置」（症例039、症例040、症例041）

「この処置は生体の錐体路系を介して、経絡の少陽経（胆・三焦経）の特定点に鍼灸の刺激を加え、脳レベルから脊髄レベルへと反対側（筋緊張側）の緊張を緩和させる処置である」（長野潔著「鍼灸わが30年の軌跡」医道の日本社）

この錐体路というのは、下行性神経路のことで筋肉を支配している運動ニューロンをいう。鍼灸の刺激が知覚伝導路によって脊髄から大脳の知覚野に伝わっていく。この時点では錐体路ではない。知覚野で受け取った刺激は今度は大脳の運動野から発して、延髄の錐体という所で交叉して反対側に至る。

この筋緊張を確認するのは、胸鎖乳突筋である。これは主として姿勢維持など長時間の収縮に適している筋肉（赤筋）で、別名緊張筋ともいわれ、簡便にできるからこれを目安にする。確認はこの筋を圧迫、撮診あるいは指で挟んで緊張や硬化を診る。

この処置は錐体路という中枢を活用するわけであるから、経絡で最も中枢に関与してまわっているのは少陽経。足の少陽胆経に至っては頸から上の穴は20もあり、この経の半分近くの経穴を占めている。同じ少陽経の手の三焦経も全経穴の3分の1を占める。この少陽経を活用することによって筋緊張からくる神経障害や血流不良を改善していく。特に耳鳴、頭痛、頸肩腕症、寝ちがひ、顎関節症、むち打ち症等に有効である。使う穴は筋緊張と反対側（健側）の「丘墟・四瀆」。この「四瀆」は通常よりも二横指位上にとる（上四瀆）。ここに圧痛、硬結が顕著にでていることが多い。これに「陽陵泉」を加えてもよい。